

## 「七十二人の派遣」

ルカの福音書 10:1~12

### はじめに

今日の箇所の内容は、以前ルカ 9 章でイエシュアが十二弟子を遣わして町や村で神の国を宣べ伝えさせたように、もう一度同じようなことをなされるという出来事です。しかし今度は 12 人ではなくその 6 倍の数の 72 人を遣わされますが、ともかくこれらの記述は今日の教会の宣教活動の教本のように用いられてきました。私も学生の頃からよく教会の兄弟姉妹たちと様々な場所に出かけて行き、家々を回って福音を伝え、また祝福を祈って歩いたものですが、そのような教会の働きは今日もお世界各地で継続されています。その働き自体は大変尊いものですが、聖書は、イエシュアは教会のそのような宣教の働きだけを願ってここに語られ、記されたのでしょうか。いきなりですが今日の箇所の最後の一節を見てください。

ルカの福音書【新改訳 2017】

10:12 あなたがたに言います。その日には、ソドムのほうが、その町よりもさばきに耐えやすいのです。

「その日には」すなわち「さばき」の日には、とあります。つまり今日の箇所は、過去はもちろん今、今日のことでなく、やがて来る未来、世の終わりの日についてのことが語られ、指し示されているということなのです。聖書は全体を通じて常に初めから終わりのことを指し示している書物です。そして人が、私たちが何をなし、何をしてはならないかという教えをこめた出来事のそのさらに奥に、神である主が、主イエシュアが何をなし、何を成し遂げられるのかということが、まさに奥義として秘められた書物なのです。ですから目に見える出来事の中に隠された「神の国の奥義」としての神のご計画を探り求め、その真の意味を尋ね求めるようにして、聖書を読む、いや読み解く必要があるのです。今日もそのように取り組んでまいりましょう。

### 1. 七十二人

ルカの福音書【新改訳 2017】

10:1 その後、主は別に七十二人を指名して、ご自分が行くつもりすべての町や場所に、先に二人ずつ遣わされた。

このように、イエシュアは「七十二人」を遣わされたとあります。もしこの事実が教会の宣教の働きを指すものならば、宣教は常にこの人数ぴったりで行わなければなりません。しかし今日、そんなことをしている日本の教会、そんなことができる宣教団体はほとんどないでしょう。私たちのこの小さな教会ではまず無理です。ですからやはりこの御言葉は神のご計画を指し示すものとして捉えなければならないのです。ではなぜイエシュアは「七十二人」を指名されたのでしょうか。この数、この人数が聖書で最初に記された箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

46:27 エジプトで生まれたヨセフの子は二人である。エジプトに来たヤコブの家族は、全部で七十人であった。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルのその家族についての記述です。当時彼らの住んでいたカナン<sup>1</sup>の地一帯を激しい飢饉が襲ったため、彼らはみな故郷を離れ、エジプトに移住しました。そこに記されている「二人」そして「七十人」、合わせて「七十二人」がこの最初の言及です。つまりこの数、人数にはエジプトすなわち異邦人の地に、異邦人の中に入って行き、そこに住み着くイスラエルの民の姿が指し示されているのです。そしてはじめに述べたように、これは「その日」すなわち終わりの日についての預言として捉えますので、そこにおけるイスラエル民である「イスラエルの残りの者」と呼ばれる者たちを指し示している「型」となっているのです。この「イスラエルの残りの者」という存在について少し説明しておきます。彼らは終わりの日すなわち大患難時代に起こされるイスラエル人、ユダヤ人たちで、今日のユダヤ人とは違い、イエシュアをダビデの子すなわちメシアとして信じる、神に選ばれ、集められる精鋭たち、戦士たちです。以下に彼らについての預言的な記述があります。

I 歴代誌【新改訳 2017】

12:38 これらすべての、戦いに備えて集まった戦士たちは、ダビデを全イスラエルの王にしようと、全き心でヘブロンに来た。イスラエルの残りの者たちも、ダビデを王にすることで心が一つになっていた。

しかし戦士と言っても武力や軍事力で戦う者たちのことではなく、同じく終わりの時代に現れる悪魔の子、世界を支配し自らを神とする獣、反キリストに逆らって「神の国の福音」を宣べ伝え、イエシュアこそが神でありメシアであることを宣教する福音の戦士たち、それがイスラエルの残りの者たちです。黙示録には「額に印を押された神のしもべたち（黙示録 7:3~4）」と記され、その数は 144000 人であるとされ、それはこの 72 人のちょうど 2000 倍の人数になります。

つまり今日の箇所には、終わりの日に「神の国」を宣べ伝えるために起こされる「イスラエルの残りの者」たちの存在とその働きが、彼らについての神のご計画が奥義として記されているのです。

そしてイエシュアはこの七十二人を「二人ずつ」遣わされたともあります。これもただの便宜上の理由ではなく意味がこめられているのです。ここには「イスラエルの残りの者」たちがどのようにして起こされる、その働きを始めるにいたったかが表されています。以下の黙示録の預言にこうあります。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

11:3 わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布をまとって千二百六十日間、預言する。」

11:4 彼らは、地を治める主の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。

11:7 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。

11:11 しかし、三日半の後、いのちの息が神から出て二人のうちに入り、彼らは自分たちの足で立った。見ていた者たちは大きな恐怖に襲われた。

11:12 二人は、天から大きな声が「ここに上れ」と言うのを聞いた。そして、彼らは雲に包まれて天に上った。彼らの敵たちはそれを見た。

11:13 そのとき、大きな地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のために七千人が死んだ。残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰した。

これは同じく終わりの日に現れる油注がれた「二人の証人」についての預言です。そして彼らの働き、その死と復活と昇天、これらを目の当たりにし、「残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰した。」という、「残った者たち」すなわちイスラエルの残りの者が「天の神に栄光を帰」す働きをするために起こされる瞬間の預言です。つまり「二人の証人」によってイスラエルの残りの者たちは神に立ち返り、「二人の証人」のその働きによって目覚め、悔い改め、神に立ち返って、立ち上がるのです。その事実を指し示してイエシュアはこの七十二人を「二人ずつ」まさに二人の証人として遣わされたのです。

## 2. 働き手を送る祈り

ルカの福音書【新改訳 2017】

10:2 そして彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。」

この御言葉は、伝道熱心な教会ではよく祈られる祈りの一つですが、本来これはイエシュアがこの「七十二人」に対して祈るように言われたものです。つまりそれはイスラエルの残りの者たちの祈るべき祈りということです。「収穫は多い…だから…働き手を送ってくださるように」という訳を見ると、私たちは普通この「働き手」とは収穫する人、刈り取る人のことだと思ってしまう。しかしこの「働き手」と訳されているヘブル語のポアリーム(פועלים)、その語源であるパール(פועל)は本来、このような意味で使われました。

出エジプト記【新改訳 2017】

15:1 そのとき、モーセとイスラエルの子らは、【主】に向かってこの歌を歌った。彼らはこう言った。

「【主】に向かって私は歌おう。主はご威光を極みまで現され、馬と乗り手を海の中に投げ込まれた。

15:2 【主】は私の力、また、ほめ歌。主は私の救いとなられた。この方こそ、私の神。私はこの方をほめたたえる。私の父の神。この方を私はあがめる。

15:17 あなたは彼らを導き、あなたのゆずりの山に植えられる。【主】よ、御住まいのために、あなたがお造りになった場所に。主よ、あなたの御手が堅く建てた聖所に。

これはモーセとイスラエルの子らが歌った歌です。「御住まい…あなたがお造りになった場所…主よ、あなたの御手が堅く建てた聖所に」という御言葉の中に聖書で最初のパールが使われているのです。つまりこの「働き手」とは刈り取りをする、収穫のための働き人たちのことではなく、「ゆずりの山」すなわちエルサレムの主の宮、聖所、神殿を建てる者たちを指し示しているのです。ちなみに刈り取り、収穫をな

されるのはもちろん「収穫の主」であられるイエシュア、地上再臨されるメシア、イエシュアただお一人です。しかしこのイエシュアは今度はお一人では来られません。以下のように預言されています。

ユダの手紙【新改訳 2017】

1:14 アダムから七代目のエノクも、彼らについてこう預言しました。「見よ、主は何万もの聖徒を引き連れて来られる。

この「何万もの聖徒」たちこそが主が送られる「働き手」なのです。ですから「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように」というこの祈りは、教会の奉仕者を増やすための祈りではなく、「御国が来ますように」という、主の祈りと同じ意味を持った祈りであり、メシアであるイエシュアの地上再臨を求める祈り、すなわち「主イエシュアよ。来てください（黙示録 22:20）」という意味を持った祈りなのです。イエシュアは終わりの日、イスラエルの残りの者たちはこの祈りを祈らなければならない、伝えなければならないと言っておられるのです。なぜならイスラエルの残りの者たちが立ち上がる時、それまで「主の祈り」としてこの祈りを祈り続けてきた私たち教会は、天に携挙されていて地上にはいないからです。このようにしてイスラエルの残りの者たちによって世の終わりの「その日」まで、主イエシュアの再臨を待ち望む声は、祈りは、この地上から絶えることがありません。このように解釈するならば、イエシュアの空中再臨による教会の携挙とイスラエルの残りの者の出現は、ほぼ同時期であると考えられ、ペンテコステの聖霊の傾注によって始まった教会の働きはここでその働きを終え、後はイスラエルの残りの者たちにバトンタッチ、託されるということになるのです。

### 3. 狼の中の子羊

ルカの福音書【新改訳 2017】

10:3 さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に子羊を送り出すようなものです。

10:4 財布も袋も持たず、履き物もはかずに行きなさい。道でだれにもあいさつしてはいけません。

イエシュアに指名され遣わされたこの「七十二人」は、異邦人の中に入って行って住み着くイスラエルの民を指し示し、終わりの日のイスラエルの残りの者たちの「型」であると述べました。携挙された教会から託された彼らのその働きを取り巻く状況は、はっきり言って最悪そのもので、イエシュアはこれを「狼の中に子羊を送り出すようなもの」とたとえられました。私たち教会もその歴史において多くの迫害を受けてきましたが、彼らを待ち受ける状況はさらに過酷なものとなりそうです。黙示録の獣と呼ばれる反キリストが現れ、世界を統一し、やがて自分を神とし、従わない者はすべて抹殺するという、終末の恐ろしい時代の中で、彼らは神の国の福音を宣べ伝えなければならないからです。そればかりでなく、地球環境もさらに劣悪なものとなっていき、まさに大患難、ただ生きるだけでも困難な時代となります。そのような時代を見据えながら、イエシュアは七十二人にこのように命じられたのです。「財布も袋も持たず、履き物もはかず」また「道でだれにもあいさつしてはいけません」というこの命令は、処世術、経済力とい

った形の人的な知恵や力を一切頼みとしない、人に頼ってはならないということです。それは逆説的に神にのみ頼れ、ただ主だけを求め、その御声に聞き従えということです。こう預言されています。

#### イザヤ書【新改訳 2017】

10:20 その日になると、イスラエルの残りの者、ヤコブの家の逃れの者は、もう二度と自分を打つ者に頼らず、イスラエルの聖なる方、【主】に真実をもって頼る。

しかしこのような主の御言葉は、何も彼らだけに語られたものではなく、アブラハムから始まった旧約時代のイスラエルの民に対しても、また私たち教会に対しても常に語られ続けてきたものです。つまりそれはイスラエルも私たち異邦人の教会もみなこの終わりの日におけるイスラエルの残りの者たちの「型」として、彼らの存在と働きを指し示して過去に存在し、また今を生きている、生かされているということなのです。このように、神のご計画において私たちはこのイスラエルの残りの者と無関係ではありません。すでに私たちは彼らとつながっており、やがて彼らに受け渡す信仰のバトンを、私たちは今持っているということです。これが、これこそが真の意味で次世代を見据えた神のご計画、真の次世代育成プロジェクトなのです。ですから私たちは終わりの時代という次世代の、その子らであるイスラエルの残りの者たちを覚え、彼らために祈り、彼らのうえに神の御心だけがなるようにと祈り、神の御心に私たちの祈りを寄り添わせていくことこそが重要なのです。ゆえにこのイスラエルの残りの者は、主イエシュアによってイスラエルにつながった私たち教会の、まだ見ぬ子どもたちなのです。ですからこれは決して無関係な話ではないのです。狼の中を行かなければならない子羊たち、この子どもたちのために祈りましょう。

#### 4. 平安の子

##### ルカの福音書【新改訳 2017】

10:5 どの家に入っても、まず、『この家に平安があるように』と言いなさい。

10:6 そこに平安の子がいたら、あなたがたの平安は、その人の上にとどまります。いなければ、その平安はあなたがたに返って来ます。

10:7 その家にとどまり、出される物を食べたり飲んだりしなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからです。家から家へと渡り歩いてはいけません。

先ほども言いましたが、今日の箇所はこのように福音を宣べ伝えなさい、という宣教の働きの教本ではありません。かつて私のしていた宣教は決して一つの家に留まることなく、家から家に渡り歩くものでした。今思えばまったくこの御言葉に則していなかったのです。しかし終わりの日のイスラエルの残りの者たちは、実際にこのような宣教の働きを行うと思われる。それは多くの人に福音を語る方法としては効率的ではありません。しかしこれには重要な神の御心が表されているのです。それは「神が人とともに住まわれる、そこにとどまられる」という神のご計画、ビジョンを象徴しているのです。そして逆に「家から家へと渡り歩いて」行くことは以下のような意味をもっているのです。

#### 創世記【新改訳 2017】

11:1 さて、全地は一つの話しことば、一つの共通のことばであった。

11:2 人々が東の方へ移動したとき、彼らはシナルの地に平地を見つけて、そこに住んだ。

11:4 彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」

これはバベルの塔が建てられた経緯の箇所です。「人々が…移動した…シナルの地に」という箇所に「渡り歩いて」という箇所と同じナーサ(נרס)が使われており、これはその最初の言及です。シナルの地とはバビロンを指し示します。これは言わずと知れた終わりの日に起こる獣、反キリストの国の「型」です。つまり「家から家へと渡り歩いてはいけません」とは反キリストのもとに行ってはならない、これに従ってはならない、というメッセージ、主のご命令が秘められているのです。

そしてここにはイスラエルの残りの者たちの最大の任務である「平安の子」を見つけることが記されています。平安、シャーローム(שלום)の子とは誰でしょうか。それはエルサレムの子たち、イスラエルにいる人々のことではありません。なぜなら先に述べたようにイスラエルの残りの者とは、異邦人の中に入って行って住み着くイスラエルの民だからです。ではここでこの「平安」シャーロームというヘブル語から考えてみましょう。この最初の言及は創世記 15:15 です。

創世記【新改訳 2017】

15:15 あなた自身は、平安のうちに先祖のもとに行く。あなたは幸せな晩年を過ごして葬られる。

これは主がアブラハムに語られたものです。このようにシャーロームとは意外にも本来は「先祖のもとに行く…葬られる」こと、つまり平安とはいえ、人が死んで葬られることを指し示しているのです。しかしその死は平安な死であり、決して悲しい、悪い死ではなく「先祖のもとに行く」すなわち神の選びの民に加えられる幸いな死です。このような死を味わう「平安の子」たちの姿が、黙示録にこう記されています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:13 すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそぞ存じます」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」

7:15 それゆえ、彼らは神の御座の前にあって、昼も夜もその神殿で神に仕えている。御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られる。

イスラエルの残りの者に見出される「平安の子」たち、それはここに預言されている「大きな患難を経てきた者たち」です。大患難時代の中で彼らは「神の国の福音」を、主イエシュアを信じるがゆえに、獣に

よって殺され、殉教の死を遂げます。しかしそれによって彼らはこの「**すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆**」に加えらる者、私たち教会と同じように御座の子羊イエシュアによって救われ、イエシュアに仕える者となるのです。

## 5. 食べなさい

ルカの福音書【新改訳 2017】

10:8 どの町に入っても、人々があなたがたを受け入れてくれたら、出された物を食べなさい。

10:9 そして、その町の病人を癒やし、彼らに『**神の国があなたがたの近くに来ている**』と言いなさい。

「**食べなさい**」、この御言葉は主がエデンの園において人に命じられた最初の命令、律法です。そして「**病人を癒やし、彼らに『神の国があなたがたの近くに来ている』と言いなさい**」とは、初臨のイエシュアの公生涯、その地上での歩み、働きを指し示すものです。このようにしてイエシュアがエデンの園を回復されるということを表すことが私たち教会の働きでもあり、ついにはイスラエルの残りの者に託される神のご計画の完成、「神の国」を指し示す働きです。彼らはこのようにして「**神の国があなたがたの近くに来ている**」ことを体現し、宣べ伝えるようになるというその事実がここには指し示されているのです。

## 6. 大通り

ルカの福音書【新改訳 2017】

10:10 しかし、どの町であれ、人々があなたがたを受け入れないなら、**大通り**に出て言いなさい。

10:11 『私たちは、足に付いたこの町のちりさえ、おまえたちに払い落として行く。しかし、**神の国が近づいたことは知っておきなさい。**』

10:12 あなたがたに言います。その日には、ソドムのほうが、その町よりもさばきに耐えやすいのです。

イエシュアはなぜ受け入れない人々に対しては「**大通り**に出て言いなさい」と言われたのでしょうか。これをヘブル語でレホーヴ(רחוב)といい、創世記 19:1 では「広場」と訳され、以下のように記されています。

創世記【新改訳 2017】

19:1 その二人の御使いは、夕暮れにソドムに着いた。ロトはソドムの門のところに座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって彼らを迎え、顔を地に付けて伏し拝んだ。

19:2 そして言った。「ご主人がた。どうか、このしもべの家に立ち寄り、足を洗って、お泊まりください。そして、朝早く旅を続けてください。」すると彼らは言った。「いや、私たちは**広場**に泊まろう。」

ソドムを訪れた二人の御使いは、この町の人々が神を受け入れない者たちであることを見て、レホーヴ「**広場**」に泊まろうとしました。(結果的にはロトの懇願により彼の家へと向かいますが)そしてロトとその娘たちを除くすべての者が滅ぼされました。このように「**大通り**に出て」行くことはその町の、主を受けられない者の滅びを表しているのです。ちなみに、黙示録にこのような預言があります。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

11:7 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。  
11:8 彼らの死体は大きな都の大通りにさらされる。その都は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれ…。

これも終わりの日に現れる「二人の証人」についての預言です。彼らは「大通り」で殺され、三日半の後によみがえり、そこから天に昇っていきます。このように「大通り」とはソドムに象徴される、神に敵対し、その結果滅ぼされる人々、滅びる国々の民を指すのです。

### おわりに

このように、今日の箇所は宣教の働きを行う上での教本ではないのです。それは終わりの日に現れる①「二人の証人」、彼らの殉教の死と復活、そして昇天によって起こされる②「イスラエルの残りの者」たちとその働き、さらに彼らによって救われる、異邦の地に住む③「平安の子」たち、そして主を受け入れない、「町のちり」のように振り落とされ、捨てられ、④滅びる者たち、これらの存在の上に現れる神のご計画が奥義として秘められ、示されているのです。聖書は神のご計画が、その終わり、その完成が記された神の計画書なのです。私たちはそのご計画を知り、そしてそれが必ずその通りに成就することを信じ、最後まで信じ続ける者でなければなりません。どうか助け主である聖霊によって、私たち一人ひとりの歩みが、霊が守られますように。主イエシュアの御名によって。